



Title	新しい利用者認証システム導入によるDXの試み：大阪 大学附属図書館の事例
Author(s)	小笠原, 静華
Citation	医学図書館. 2026, 73(1), p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



新しい利用者認証システム導入によるDXの試み：大阪大学附属図書館の事例

小笠原静華*

大阪大学附属図書館 生命科学図書館

I. はじめに

近年、大学図書館におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）の推進は、利用者サービスの向上と業務効率化を両立するための喫緊の課題となっている。なかでも、物理的な利用者カードの管理に伴う業務負担、およびその紛失や不携帯に起因する諸問題は、利用者と図書館の双方にとって長年の懸案事項であった。

こうした状況を踏まえ、大阪大学附属図書館は、物理カードに依存しない「カードレス運用」による利便性の向上と管理コストの削減を目指した。その一環として、全学的なDX構想「OUDX（Osaka University Digital Transformation）」に基づく「大阪大学統合ID」（以下、OUID）基盤を活用し、2025年度に顔認証とQRコード認証を用いた新たな利用者認証システム（以下、本システム）を全4館（総合、生命科学、理工学、外国学）に導入した。

本稿では、従来の認証形態からの転換を図るこの先駆的な取り組みについて大阪大学（以下、本学）の医学系図書館である生命科学図書館の事例を中心に報告する。

II. システム概要と導入の目的

本システムの中核は、本学の全学統合ID基盤であるOUIDとの連携にある。これにより、利用者は、従来の物理的な学生証・利用者カードに加え、以下の2方式を用いて入館ゲートの通過や自動貸出機での資料貸出が可能となった。

- ・顔認証：各機器に付設されたカメラにより、顔を事前に登録した顔写真データと照合し、生体情報を用いて認証を行う。
- ・QRコード認証：スマートフォンアプリ「マイハンダイアプリ」に表示されるQRコードをリーダーで読み

取り、認証を行う。

システム導入の目的は多岐にわたる。利用者に対しては、カード不携帯時の利用が制限されるといった従来の課題を解消し、「いつでも、手ぶらで」利用できるストレスフリーな環境を提供することで、利便性の飛躍的な向上を図った。

一方、図書館にとっては、利用者カードの発行・更新といった窓口業務および管理負担が軽減される。これにより生み出された人的リソースを、レファレンスサービスやオープンサイエンス推進等の研究支援といった、より専門性の高い「対人サービス」へ再配分することが可能となった。これは、図書館サービスの質的転換と高度化に直結する重要な施策であるといえる。



写真1. 入館ゲート



写真2. 顔認証デバイス

III. 実装における工夫とセキュリティ

1. 利用者属性に応じた登録方式

学部生および大学院生については、入学時に大学へ提出済みの顔写真データをOUID基盤経由で自動連携する方式を採用した。これにより、学生は個別の登録手続きを行うことなく顔認証を利用できる。一方、教職員についてはプライバシー保護の観点から「オプトイン方式」とした。本人がOUIDシステム上で顔写真を任意登録す

*Shizuka OGASAWARA：〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-3.
(2026年2月16日 受理)



ることで初めて顔認証が有効となる（なお、QRコード認証は「マイハンダイ」アプリの導入のみで利用可能である）。

2. セキュリティの強化

QRコード認証については、システム導入当初は静的QRコードを使用していたが、スクリーンショットの悪用等によるなりすましリスクを排除するため、導入半年後に動的QRコードに移行した。動的QRコードでは一定時間ごとにコードが自動更新されるため、第三者による不正利用をより強固に防止することが可能となった。

IV. 生命科学図書館での導入後の変化

筆者が所属する生命科学図書館において、システム導入から半年後に入館ゲートにおける各認証方式の利用率を調査した（特定の日に1時間の定点観測を実施）。その結果、顔認証が73%、QRコード認証が3%、従来の物理カードによる認証が24%という割合であった。

この結果を、本学の他館における顔認証の利用率（総合図書館：94%、理工学図書館：89%）と比較すると、生命科学図書館では顔認証の利用率が低い傾向にある。これは、生命科学図書館の利用者に占める教職員の比率が他館と比べて高いことに起因すると考えられる。学生とは異なり、教職員はOUIDシステムへの顔写真登録が任意であるため、物理カードからの移行に対して心理的障壁や登録手続きの負担が影響していると推察される。今後は、利用者カードの発行・更新時に顔認証およびQRコード認証への切り替えを積極的に案内することで、さらなる移行を促していく計画である。

一方で、本学医学部附属病院に所属する一部の看護師や研究員など、1年単位で雇用更新が発生する利用者への対応も改善された。

本学ではこれまで全学で共通の教職員証が発行されておらず、こうした教職員については個別に図書館利用者票の発行が必須であった。そのため、従来、利用者カードの発行・更新業務に多くの負荷が生じていたが、本システムの導入により、これらの事務作業を大幅に軽減することが可能となった。

その結果、適切なデータベースの選定やキーワード、シソーラスの助言といった、医学系図書館特有の専門性を要する「文献相談サービス」に、人的リソースを重点的に投入できる体制が整った。こうした定型業務の削減が、本来注力すべき専門サービスの質向上へと直結したことは、本システム導入における特筆すべき成果といえる。

V. おわりに

本事例は、国立大学図書館として顔認証およびQRコード認証を全面導入した初の取り組みである。導入後も、利用者から寄せられるフィードバックに基づき、顔認証の精度向上やUX（ユーザーエクスペリエンス）の改善を段階的に進めている。これらの継続的な改善により、利用者がより安心かつ快適に図書館サービスを楽しめる環境を整備していく。

今回のシステム導入はゴールではなく、新たな図書館サービスを創造する「スタートライン」である。今後も、OUID基盤を一層活用し、多様な図書館サービスがシームレスに連携する「未来の図書館」の実現に向けて、さらなる知見の蓄積と挑戦を続けていきたい。